ゼロの使い魔はチート

大神レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔はチート

【Ｎコード】
Ｎ７４４７Ｊ

【作者名】
大神レオ

【あらすじ】
子供をかばって死んだ主人公が神様に『ゼロの使い魔』の世界に飛ばされる！？
チートな主人公はゼロの使い魔の世界でどう行動するのか？

プロローグ

俺は死んだ。
トラックに轢かれそうになっていた
子供をかばって、とゆうありがちな死に方だった。

「まぁ、特に悔いもないし、このまま成仏しますかね…」

『いや、そうゆうわけにもいかないんだよね』

声の方向に振り向くと…小さな女の子が立っていた。

「君は誰だ？」

「私は神様だよ」

「へぇ、そうなのか」

「疑わないの？」

「まぁ、自分も死んでい今こうして幽霊になってるわけだしな、神様だって信じられるさ」

「うん、飲み込みが早いことはいいことだね」

女の子…神様は苦笑しながら言った。

「それで？『そうゆうわけにはいかない』ってどうゆうことだ？」

先ほど神様が言った言葉についての疑問をなげかけた

「あーそれなんだけどね…、実は君はあそこで死んではいけなかったんだよね」

「死んではいけなかった？」

「んー、て言うよりは『死ぬ時じゃなかった』ってとこかな？」

「どうゆうことだ？」

「人間の死ぬ時って言うのは決まっているもんでね、それによって世界の均衡が保たれているんだけど…君はその均衡をやぶっちゃったんだよね」

神様は困ったように言った。
俺は頭の回転が速い方なので
それが指すことがすぐにわかった。

「つまり、俺は『死ぬ時』じゃない時に死んじまって
世界の均衡が壊れてちまう…ってことか？」

「そうゆうこと、だから君はこの世界にいさせるわけにはいかないんだ…
だからその代わりに君が望む世界に送って
あげようと思うんだ……どうかな？」

「あぁ、別にいいぜ」

特にこの世界に心残りはなかったし。

どうせだったら別な世界で思いっきり遊んでみたい。

「じゃあ『ゼロの使い魔』の世界でたのむ」

「うん、分かったそれと君にある『能力(チカラ)』をつけておくから
あっちの世界で困った時使ってね」

「オッケー、でもそれどんな「じゃ！　飛ばすよー！！」

神様のかけ声とともに俺の意識は薄れていった。

…人の話聞けよな。

プロローグ（後書き）

どうもはじめまして大神レオです。

「ゼロの使い魔はチート」はじまりました。

初心者&初投稿ですので下手な部分もあると思いますが
お付き合いください。

第一話　召還されて

目を開けると抜けるような大空をバックに
桃色がかったブロンドヘヤー。
ツンデレ釘宮ｖｏｉｃｅのルイズが立っていた。

「あんた誰？」

「俺は嵐迅（あらしじん）、１７歳で身長１７３、体重６３だ」

「誰もそこまで聞いてないわよ…あんたどこの平民？」

「あー、平民ではない」

「何？　じゃあメイジだって言うの？」

「いや、そうゆうわけでもないんだが…」

俺はどう説明するか考えていると後ろから

「ルイズ『サモン・サーヴァント』で平民呼び出してどうするのよ？」

と言う女の声が聞こえ、その場にいたルイズ以外の全員が笑った。

（まぁ知ってたけど嫌な奴等だなぁ）

「うるさいわね！　ちょっと失敗しただけよ！！」

ルイズは怒りを含みながら言った。

「ちょっとって君、さっきから何度も失敗してるじゃないか」

「さすがは『ゼロのルイズ』だ」

その声に合わせ周りはさらに笑う。

ルイズは顔を真っ赤にすると

俺から目を外し

「ミスタ・コルベール！！」

「なんだねミス・ヴァリエール」

生徒の間からミスターツルッパゲ、コルベール先生が出てきた。

頭が太陽に輝いている。

「もう一回やりなおさせてください！」

「それはダメだミス・ヴァリエール」

「どうしてですか！」

「春の使い魔召還は先生な儀式だからね、

好む好まざるにかかわらず彼を使い魔にするしかない」

「でもっ！……分かりました」

（お、話がまとまったみたいだな）

ルイズが俺の目の前まで歩み寄ってきた。

「あんた感謝しなさいよね、貴族とこんなことされるなんて
普通ありえないんだから」

そして手に持った小さな杖を振るい。

「我が名は
ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
五つの力を司りしペンタゴンこの者に祝福を与え我の使い魔となせ」

そしてゆっくりと俺に顔を近づけ
……唇が重ねられた。

（うおー、柔らけー…）

とか思っていると

「ん？　ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

猛烈な痛みが左手に襲ってきた。

（うおぉぉ！！　キスに気をとられてすっかり忘れていたぁあ！！）

痛みにのた打ち回っていると

「うるさいわね、我慢しなさい使い魔のルーンが刻まれてるだけよ」

知ってるわ！　とか思っていると痛みはおさまり。
コルベール先生が「珍しいルーンだな」

といってスケッチを取っていた。

そしてスケッチを取り終わると
「皆教室に戻るぞ」とか言って
空飛んだりして戻っていった。
もちろんルイズは魔法なんか使えないので歩きである。
その時「なんで私だけこんなのなのよ…」とかブツブツ呟いていたが
華麗にスルーした。

ま、せっかく来た世界だし十分に楽しんでみますかね。

第一話　召還されて（後書き）

なんも進まなかったｏｒｚ

まぁ、とゆーかこの回は主人公の自己紹介のためだけにつくったんですがｗ

次からはもう少し話を進めたいと思います。

あと、どんな能力かも書くつもりです。

では

第二話　能力の名は

教室で使い魔との関係がなんだのとか言う話が終わり、
部屋に戻った後、俺は自分が異世界から来たことを話した。

「嘘でしょ？　異世界なんてあるわけないじゃない」

「本当だ、第一こんな時に嘘言ってどうすんだよ？」

「……だったら証拠を見せてよ」

「あぁ、いいぞ」

そういうと俺はポケットにしまってあった
携帯電話を取り出した。

（才人はパソコン出してけど…、まぁ仕方ないか）

「なにそれ？」

「これは携帯電話って言うんだ俺達の世界の人は
これで遠くの人と話をしていた」

「遠くって……どれくらい？」

「国際電話ってやつだったら世界中でもできるぞ」

「世界中！？」

ルイズは心底驚いたような声をだした
「すごいわね～、あんたの世界の魔法」
「魔法じゃない『科学』だ」
「『カガク』……って何？」
「科学っつーのは、この世界の道具と違って
人の手だけで作られたもんだ」
「魔法は？」
「無い」
「魔法がないの！？」
「あぁ、だからそのかわりこの『科学』が発達してんだよ」
ルイズは新しいおもちゃを与えられた
子供のように携帯電話を弄り、しばらくそうしていると。
「まぁ、いいわ、分かった信じてあげる、あんたのこと」
本当はまだ信じてないんだろうが…まぁいいだろう。
「で、俺は使い魔として召還された……が
何をすればいいんだ？」
「まず、使い魔には主人の目となり耳となる能力を与えられるわ」

「なんか見えるか？」

「……全然」

ルイズは落ち込んだ。

「他は？」

「えっと秘薬の調合とかそのための素材集めとか」

「無理、秘薬とか知らないし」

「はうぅう……」

ルイズはもっと落ち込んだ。

「……最後っ！　これが一番大事よ！　主人を守ること！！　…って言っても」

ルイズは悲しい目で俺を一瞥し

「あんたじゃ無理よね、いかにも弱そうだし…」

「おいおい、人を見た目で判断するなよ、俺結構強いんだぜ？」

こう見えても空手、剣道共に初段の資格はもっている、

大会だって県の上位には入ってる方だ。

「本当にぃ？」

めっちゃ疑いの眼差しで見ている。

「あぁ、本当だとも」

「……」

「……」

見つめ逢うこと数秒

「……はぁ、まぁいいわ…今日は疲れたしもう寝るわ」

「俺は？」

ルイズは俺の足元を指差し

「あんたは床よ、わらと毛布くらいならあげるから
優しいご主人さまに感謝しなさい」

ルイズは偉そうに言った。
ま、知ってましたけどね。

「はいはい、分かりました、それではお休みなさいご主人様」

「どこ行くのよ？」

「散歩」

と言って俺はルイズの部屋を出て行った。

学園の中庭まで出る、
空を見上げると二つの月が寄り添うようにならんでいる。
（本当に来たんだなぁ、この世界に…）
俺はベンチに座り、ハァとため息をついた。
（あの神様は俺に能力を与えたっつってたけど、
結局なんの力か分かんないし…、
ガンダールヴの力だけじゃ正直きついぞ…）
「なにをため息なんかついてるのかな？」
「あ？」
顔を上げると目の前に神様がいた……ただし十分の一スケール
手の平サイズだが。
「や！　どうこの世界は？」
「どうってお前…つーか人の話きけっつーの！！　俺に何の力くれたんだよ！？」
「あれ、説明してなかったけ？」
「されとらんわ！！」
「あー、そっかぁ…テヘッ☆」

「テヘッ☆…じゃねーんだよ！！」

頭を指先で連打する。

「痛い痛い痛い！！　ごめんって！！」

選択肢

・止めてあげる
・かまわず続ける　↑　ピッ

「痛たたたた！！　ごめんごめんごめん！！」

「悪いな俺は根に持つ方なんだ」

「許してぇえ！！　今から説明するからぁ！！」

それならば、と止めてあげる。

「痛いぃ…、もうこれでも神様なんだよ？　その扱いはないでしょ！？」

「知るか、いいから説明しろ」

まったくもう、とまだ不満げな様子だったが説明をはじめる。

「えー、コホン、君に与えた能力は実にシンプルです
だから、説明するよりやってみた方が早いね」

「どうゆうことだ？」

「んーと、それじゃあ頭のなかでなにか適当なものを思い浮かべてみて
物でも生き物でもいいから」
なんなんだ？　と思いつつ適当にナイフを思い浮かべてみる
すると……
ブオンッ！！
「うおっ！　なんだこれ、出てきたぞ！？」
「そう！　それが君に与えた能力『創造主（クリエイター）』だよ」
「『創造主（クリエイター）』？」
「そう！　これは今やった通り頭に思い浮かべたものを実際に
出すことができる神の力の一つだよ」
「ほー、そりゃすげぇ」
「でしょ？　これすごいんだよー？　神の能力のなかでも最高峰の
だもん！
ありがたく受け取ってね？」
「おう、サンキューな」
「へへー、あ、でもね、なんでも創造できるってわけじゃないんだ」
「どうゆうことだ？」

「創造したいものの構造を大体でいいから理解していないとだめなんだ」

「あ～と、つまりどういうことだ？」

「じゃあ例えると、かめはめ波ってどうやって出るか分かる？」

「確か、気を手のひらに集めて一気に放出するんだっけ？」

「そうそう、そうゆうことが大体分かってればいいんだ、じゃあタケコプターは？」

「タケコプターは…う～む、よく分からん」

「そういうのは能力の発動が不可能ってことだよ、分かった？」

「おう」

説明し終えると神様はバイバーイ、といって空に消えていった。

「さて、では試し撃ちといきますかね…」

深く息を吐き、体の力を抜いてリラックスさせる。

「フゥー…うっし！　いくぞ」

そして両手を右の腰にもっていき、

子供なら誰しも一回は真似したことのある。

あの技の体制をとる。

「かぁー！」

「めぇー！」

「はぁー！」

「めぇー！…」

「波ぁあああああああ！！！」

上空に向けて極太光線を放つ、
打った瞬間空が昼真のように明るくなる。

「マジでできたよ…」

かめはめ波が出せた事実に呆然としていると

「なんだ今の光は！？」

「こっちの方からだったぞ！？」

生徒や先生達が集まってきた。

「うわ！　やっべ！！」

急いでルイズの部屋の前まで戻る。

「ふぅ…、危なかった」

静かに部屋に入るとルイズは気持ちよさそうに寝息を立てて眠っていた。
どうやらさっきの騒ぎには気づいていないようだ。
「ふぁぁあああ…、さて俺も寝ますかね」
といって藁とに入り毛布にくるまる。
（あの能力はスゲェな…、これからどんどん活用せねば…）
楽しい明日からのことを考えつつ俺は眠りについた。

第二話　能力の名は（後書き）

はい、能力紹介がやっとできました

創造主はオリジナルの能力ですｗｗ

さてさて、迅はこの力をどう使うのかお楽しみに

第三話　使い魔

目を開けると
普段とは違う風景が広がっている。
（ま、そりゃ夢じゃねーよな…）

夢だったら逆にショックだし、
せっかく『かめは〇波』出せたんだもん。
と思いつつ体を上げる。

「よいしょっ……あー、体痛ぇ、さすがに床はないな」

と言いつつルイズを起こしに行く、
スピー、とよだれをたらして眠っている。

（この野郎、気持ちよさそうに寝やがって…）

「おい、ルイズ起きろ、朝だぞ」

「…ふぇ？　あんた誰？」

「嵐迅、お前が呼び出した使い魔だ、忘れんじゃねぇよ、
…後よだれ拭け」」

「あぁ、そうだったわね、じゃ着替え取って」

「ほれ」

「下着」

「ほい」
「スカート」
「ほれ」
「シャツ」
「ほい」
「ブラウス」
「ほれ」
指定されたものを次々と出して行く俺
それを見てルイズは
「…あんたなんで全部場所知ってんのよ？」
と気味悪そうに言う。
「使い魔だからだろ？　なんとなくわかるんだよ、
契約した時にお前の情報が入ってきたんじゃないか？」
本当は大嘘だ、原作をみてるからな。
「使い魔にそんな能力あったかしらね…、まぁいいわじゃ服を着させて」

「そんくらい自分で着ろ」
「使い魔でしょ？　主人の言うことを聞きなさい」
「もう子供じゃないんだから自分で着なさい」
「あ、そ、じゃああんたは朝ごはん抜きね」
「どうぞご自由に」
ルイズが着替える間外に出て待っていると
向かいの部屋から赤いトカゲがでてきた。
「きゅるる」
「えっと、確かサラマンダーだよな、火竜山脈の」
「そうよ、よく知ってるわね？」
燃えるような赤い髪と褐色の肌をもった女、
……キュルケだ。
「まぁな」
「ふ～ん、ただの平民だと思ってったけどなかなかやるわね、
お名前は？」
「嵐迅だ」
「アラシジン？　変な名前ね」

「うるせ」

「フフッ…それじゃまた後で会いましょう？」

といってサラマンダーを連れ去っていった

すると、同じタイミングでルイズが部屋から出てきた

「く～！！　くやし～！　キュルケは火竜山脈のサラマンダー召還したってのに、なんで私はあんたなのよ！！」

「盗み聞きしてたのかよ」

「私はヴァリエール家の三女なのよ！？　なんであんたみたいのが使い魔なのよ！！」

「そのヴァリエール家の娘が盗み聞きしていいのか？」

「……」

「ほら、さっさと行くぞ」

ルイズはまだ何かうだうだ言っていたが、

やっぱり華麗にスルーした。

そして食堂前。

「じゃ、俺どっかぶらついてくるから」

「ご飯は？」

「どうせロクなもんくれねぇんだろ？」
「そりゃそうでしょ、使い魔だもの」
「だったらいいよ、特に腹も減ってないし」
「そう…わかったわ…」
そういって食堂に入っていった。
でも、ルイズが少しだけ寂しそうな感じがした、
……が気のせいだろう。

そして使い魔の集まる広場。
「おぉ、いっぱいいるねぇ」
目玉だけで浮いてる奴、
犬や猫、キュルケのサラマンダーなどもいる。
俺が入ってきたのを見るとこっちに寄ってきた。
「おうおう、よしよし……、しかしこれだけいるのに喋れんのはいないんだよなぁ」
と思っていると広場のすみっこの方からシルフィードがこちらを見ていた
シルフィードの近くまで行くとよぉ、と声を掛けたきゅいきゅい！と高い声で返事を返して来る

「お前本当は話せるんだろ？　暇なんだ話し相手になってくれないか？」

と言うとシルフィードは驚いて

「ど、どうしてバレてるのね！　お姉さましか分からないのに！！」

「まぁ、細かいことは気にするなよ」

最初は警戒していたがシルフィードの明るい性格もあり
すぐに打ち解けることができた。

「と、そろそろルイズと合流しなきゃな、あ、このことはお前のご主人様や
他のやつらには言わないでくれよ？」

「どうしてなのね？」

まぁいろいろとな、と苦笑いをしつつその場を後にした
その後ルイズと合流し授業を受ける、
途中ルイズが爆発させて物がぶっ飛んできたりしたが
分かってたので難なく回避した。

さすが、は『ゼロのルイズ』様だな。と思った。

第三話　使い魔（後書き）

薄いっ！！　なんも面白くない！！

…すいません、なんにもない話になってしまいましたｏｒｚ

次回はもっと濃く書きたいです。

第四話　決闘！？

オールド・オスマン！！」

コルベールが慌てた様子で
学長室に入ってきた。

「ごめん、やめて、痛い、もうしない、本当に」

ロングルビルがオールド・オスマンを
ストンピングしている所だった。

「……」

コルベールがそれを呆然と見ていると
ロングルビルはそれに気づき、
少し頬を赤らめて蹴るのをやめた。

「痛たたた…、どうしたんだね？　ミスタ…あー、なんだっけ？」

コルベールはハッとして言葉を返す。

「コルベールです！　お忘れですか！！　それよりも大変なんです
！！」

「そうそう、ハゲベール君、で？　その書物がどうかしたのかね？」

「コルベールです！！　それとこれも見てください！！」

その書物とスケッチをみたとたん、
コルベールの表情が真剣なものに変わった。
「ミス・ロングルビル、席を外しなさい」
「…分かりました」
そしてロングルビルが部屋を出たのを確認すると
「…では、詳しく説明しなさい」

「……」
「……」
俺は今、ルイズが爆破した教室掃除をしている。
ただ、……なんか空気が重いのだ。
どうすればこの空気を打開できるんだ！　と考えていると
ルイズが口を開いた。
「ねぇ？」
「ん？　どうした？」
「あんたもう分かったでしょ？　私の二つ名が『ゼロのルイズ』って言う理由」

「…あぁ、魔法が使えない、成功率『ゼロ』だから…だろ？」

「その通りよ」

ルイズは自傷気味に笑った

「あんたも馬鹿にしてるんでしょ？　悪かったわねこんなダメなご主人様で…」

ルイズは俯いてしまった。
とても悲しい目をしていて見てられない

「おい」

「何よ？」

「お前は悔しいか？　『ゼロのルイズ』って呼ばれて？」

「あたりまえじゃない」

「そりゃそうだよなぁ？　魔法できない、胸もない全部が『ゼロ』だからなぁ？」

俺は馬鹿にするように言う。

「っ！…あんた！！　いい加減に「でも！」

「でも…お前は頑張ってるんだろう？　どんなに馬鹿にされても、誰になんと言われても」

「……」

「お前くらい努力して一生懸命な奴はいないんだ、お前のことが分からねぇ奴に
お前を馬鹿にする権利はねぇよ」

ルイズは黙って聞いている

「だから元気だせよ、な？」

ルイズはしばらく俯いたままだったが顔を挙げ、

「ありがとう」

と微笑みながら言った。

（それに、可愛いんだからな……）

「……でもねぇ」

「ん？」

「あんたさっき『胸もゼロ』って言わなかったかしら？」

「え…いや、それはお前を元気づけようと」

俺は慌てながら弁解する。
しかしそれは無意味なことだったようで

「問答無用よ！！　あんた昼食抜きっ！！」

「そ、そんなぁ〜〜！！」
俺の悲痛な叫ぶが教室に響いた。
その後結局俺は飯を食えず食堂の外を歩いていた。
「ちくしょう…ルイズの野郎」
あんなこと言わなきゃよかった。
と思いつつ壁に手をつく。
すると
「どうなさいました？」
純朴そうなメイドさんが立っていた。
「あら…あなたは確かミス・ヴァリエールが呼び出した使い魔の…」
「嵐迅だ」
「変わったお名前ですね、私はシエスタといいます」
そうそう、ここでシエスタと出会うんだったな。
と思い出していると、
グゥ〜
と腹の音がした。
「お腹が空いてるんですね」
「はい…」

「でしたらこちらに来てください」

と言われシエスタの後ろについて行った。

「おぉ、シエスタこれ本当に美味しいよ」

「ありがとうございます、まだまだありますから、たくさん食べてくださいね」

シエスタが隣でニコニコしながら言ってくる

（ヤベェ、シエスタが天使に見えてきた）

十分後、俺は飯を食べ終え配給の手伝いをしていた。

運んでいる途中で液体の入ったビンを拾った。

（コイツは…）

「おい、ギーシュお前は一体誰と付き合っているんだよ？」

男の声が聞こえ前を向くと、数人の男の真ん中に、

いかにも、女たらしと言う感じの男…ギーシュが立っていた。

「付き合う？　僕にそのような特定の女性はいないのさ薔薇は

たくさんの人を楽しませるためにあるのだからね」

しかも自分を薔薇にたとえている

仕方がないのでビンをギーシュに返す。

「落しモンだぞ、色男さん」

「ん？　何を言ってるんだね君？　これは僕のじゃない」

顔を青くし冷や汗をたらしながらギーシュは言う。

「これはモンモランシーが自分のために作っている香水じゃないか！？

ギーシュ君はモンモランシーと付き合っているんだな？」

「ギーシュ様！！」

すると栗色の髪をした可愛い少女が現れた。

「ケティ、違うんだこれは」

「ギーシュ様の…ギーシュ様の……バカァ！！」

バチーン！！　と言う快音と共にギーシュの頬が引っ叩かれる。

そしてケティは泣きながら去っていった。

次にコツコツと金色の髪の少女が現れ、

「あぁ、モンモランシー違うんだこっ」

ゴッ！！

「グッハァ！！」

ギーシュが言い訳を言い切る前にモンモランシーのグーパンチが炸裂した

「…サイテー」

とギーシュをゴミを見る様な目で一瞥するとその場から立ち去った

俺はその光景を目の当たりにし

「ぎゃはははははは！！！」

大爆笑していた

「君のせいで二人のレディの名誉に傷がついた、どうしてくれるんだね？」

ギーシュが頬を擦りながら言う

「二股してるお前が悪い」

すると周りもドッと、笑った

ギーシュは顔を真っ赤にしながら

「君はゼロのルイズの使い魔だったね、貴族に対してそんな態度をとったらどうなるか教えてあげよう」

「おぉ、いいぜ？　どうなるんだよ？」

あえて挑発するように言う

「くっ…、いいだろう、君に決闘を申し込む！！」

「いいぜ？　返り討ちにしてやる」

「ふん、せいぜい強がっているがいい、場所はヴェストリの広場だ！！」

そしてギーシュはその場を去っていった

するとするにルイズが駆け寄ってきて

「あんた！　なにしてんのよ？」

「いやただムカついたから、それよりヴェストリの広場ってどこ？」

「あんたねぇ！　平民が貴族に勝てるわけ無いでしょう！！　さっさと頭さげて許してもらうのよ！！」

ルイズが叫ぶように言う

まだ早いがあの言葉を使う

「やだね、だって…下げたくない頭は下げられねぇ」

「で、でも！！」

「大丈夫だって、俺強いんだぜ？」

と言ってヴェストリの広場に向かった

――

「逃げずに来たことは誉めてやろう！」
「誰が逃げるかってのてめえみてぇな奴相手に」
「いつまでそんなに強気でいられるかな？」
と言ってギーシュは薔薇の造花を振るう
すると一体のゴーレムがでてきた
「僕はメイジだだから魔法で戦う、よもや文句あるまいね」
「あぁ、いいぜ」
「僕の二つ名は『青銅』、青銅のギーシュ、従って、青銅のゴーレムがお相手する」
するとゴーレムがこちらに向かって走りだした
それに対応するため空手の構えをとる
大振りの右、それを難なく払いのける
「あまい！！」
空いた腹部に正拳突きを入れる…が
ゴォ〜ン！！
電流が体に走ってくる
「いっ…ってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

右手を押さえながら走り回る

「君は馬鹿かい？　青銅と言っているだろう？」

そういやそうでした、と思っている内に
再びゴーレムが襲い掛かってくる

「うわっと！！」

ギリギリかわしながら叫ぶ

「おい！　丸腰の平民相手に武器もださないっつーのは貴族としてどーなんだ？！」

「ふむ、そういわれればそうだな…、いいだろう！」

と再び造花を振るい剣を出す

「待ってました！！」

すぐにその剣を掴む
すると右手のルーンが光り出し
力が沸き体が羽のように軽くなる

（おぉ、すげぇガンダールヴの力…ゴーレムがめっちゃ遅く見えるし）

すぐさまゴーレムの懐に入り切り倒す

「なっ！！　く、行け！！！」

残りのゴーレム7体を出す
3体が俺の目の前に立ちふさがる

（こんまま、ぶっ倒してもいいけど、それじゃあ面白くなぇよな…
よっしゃ！）

頭の中に渦巻く球体を浮かべる

ブゥゥウン！！

手の平に球体『創造』される
それを目の前のゴーレムめがけて放つ！！

「螺旋丸！！！！」

その球体をぶつけられたゴーレムが他の2体を巻き込みながらぶっ飛んでいく、
壁に叩きつけられた時には遠心力でグシャグシャになっていた
そしてギーシュの下まで駆け寄る

「ヒーーーーーーハーーーーーー！！」

「ま、守れ！！」

残りの四体が行く手を阻む
すぐさま頭に無数の剣を浮かべる
そして『創造』される
剣を腰に構え

「…Ｄｉｅ！！」

目にも止まらぬ斬撃がゴーレム達を
切り刻む、『青銅』はただの鉄の塊になっていた
俺はギーシュの目の前までゆっくりと歩みよる

「ひ、ひぃぃぃぃ！！」

ギーシュは腰を抜かしているようだった。

「ま、参っ「黙れ」

ギーシュが降参する前に殴り飛ばす

「ぐあっ！！……グフッ」

ギーシュは地面に叩きつけられ気絶した。

「反省しやがれ」

剣を地面に刺しルイズの元へ戻る。
そしてルイズの前まで行くと、
驚いて声が出ないルイズに、

「な？　俺強いだろ？」

と言ってニコッと笑った。

第四話　決闘！？（後書き）

最初の戦闘イベント決闘

いかがでしたか？

技解説

螺旋丸

ＮＡＲＵＴＯの主人公うずまきナルトの必殺技

無数の剣

Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　ｃｒｙ３

に出てくる主人公ダンテの兄バージルの技

幻影剣と言う

次も頑張りたいです！！

でわ！！

第五話　ソラ

「やはり勝ちましたか…」

ここは学長室
オールド・オスマンとコルベールが
広場で行われていた決闘の騒ぎの一部始終を
『遠見の鏡』で見ていた。

「うむ、そうじゃな」

「ギーシュは一番レベルの低い『ドット』メイジですが
平民に遅れを取るとは到底思えません、やはり彼は『ガンダールヴ』
！！」

「うむむむ……」

「それに彼が使ったあの『能力』…あれは一体…」

「分からん、が彼がガンダールヴであることは間違いなかろう…
だが王室に報告するのはやめるのじゃ」

コルベールは厳しい表情で重々しく言った。

「どうしてですか！？　これは大発見なのですよ？
現代に蘇った『ガンダールヴ』！」

コルベールは激しく興奮している
鼻息を荒くし

目が血走っている。
そのようすにコルベールは若干引きつつも
「王室のボンクラ共に報告したら、彼とその主人を間違いなく
戦争に引っ張り出すじゃろう
そんなことにわしの学院の生徒を使わせるわけにはいかん！！」
戦争と言う言葉を聞きコルベールは落ち着きを取り戻す
「そ、そうですね…まったく学院長の深謀には恐れいります」
「この件は私が預かる！　他言は無用じゃミスタ・コルベール！！」
「は、かしこまりました！！」
と言ってコルベールはうやうやしく礼をすると部屋を出て行った
「ふむ、しかし無能なメイジと契約した彼が何故『ガンダールヴ』に
選ばれたんじゃろうなぁ…」
と遠くを見るように呟いた。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「あんたさっきの力はなんなのよ！！　突然速くなったりとか、ワ
ルキューレ
を吹き飛ばしたりとか！！」
ギーシュを倒した後
俺は部屋に戻るためルイズと一緒に歩いていた。

「はっはっは！　細かいことは気にするな」
帰り際に辺りの生徒達に
「お前すげぇよ！！」とか
「キザ野郎を倒してくれてありがとう！！」
などと散々称えられたため
完全に天狗になっていた。
「はっはっはぁ！！！」
もうウザイくらい天狗だった
「あんた、いい加減にしなさいよ！　一体何者なのよあなた！」
「俺様、神様、仏様、なんつって☆」
ブチッ！
なにか嫌なものが切れた音がした
ゆっくりと後ろに振り向くとルイズの周りに怒りのオーラが
発生していた。
「あ、あのルイズ、さん？」
ルイズが杖を振り上げ呪文を詠唱している
そして詠唱を終えると俺にむかって
「使い魔のくせに調子に乗るんじゃないわよバカジンーーー！」

…振り下ろした
回避もできずに爆発をもろに受け俺の意識は吹っ飛んでいった

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

目を覚ます、柔らかい感覚が身を包んでいる
俺はベットに寝かされていたようだ。
辺りは暗くどうやら夜のようだった、
月の光だけが部屋に優しく差し込んでいる。

（俺は一体…）

フニッ、と柔らかい感触がしたので見ると
ルイズが眠っていたいた、目元には涙の後らしきものがある
するとシエスタが部屋に入ってきた。

「ジンさん、目が覚めたんですね！！」

「シエスタ、俺は一体？」

俺はルイズに吹っ飛ばされた後の説明を聞いた
俺を吹っ飛ばしたルイズは慌てて俺を部屋まで運び
治癒の魔法をかけても目を覚まさないを俺を
三日三晩必死に看病してくれたこと

「そうだったのか、ありがとうシエスタ迷惑かけたな」

「いえいえ、看病なさったのはほとんどミス・ヴァリエールですから」

ルイズの方を向く気持ちよさそうに眠っているルイズに、
「ありがとう」と言って頭を撫でる、
（といっても俺が倒れた原因はルイズなのだが）
ルイズは眠りながら少しだけ微笑んだような気がした。
そのあと俺は体を起こしてベットから抜け、
起こさないようにルイズをベットに寝させた。

「動いて大丈夫なんですか？」

シエスタが心配そうに言う

「あぁ、特に体に異常はないからね」

「そうですか、じゃあ私はこれで失礼しますね？」

と言って部屋から出て行こうとする。

「あ、途中まで送っていくよ、散歩もしたいし」

と言ってシエスタを途中まで送り
広場へ散歩に行き
ベンチに座る。
すると目の前が光出し
神様が現れる
しかし

「今回はそのまんまの大きさなんだな」

「まぁね～♪」

といつもどうり明るく言うと俺の足の間に
座ってきた。

「しかし派手にやってるね～」

3日前の決闘のことだろう。

「まぁな、おかげで楽しいぜ」

笑いながら言う。

「でも、あんまり無茶しちゃだめだよ？」

「あぁ、原作ぶっ壊しちまうからな、あ、そうだ！
生き物召還した場合もまた同じ奴だせんのか？
記憶とかそのまんまで」

この後の計画に必要な質問をする。

「うん、可能だよ」

相変わらずニコニコと楽しそうに笑っている
改めてその姿を見るとどう見ても子供である
薄緑の髪型にちょんと出たアホ毛
なんつーか生徒会の○存の桜野く○むににている気がする

（こんなんが本当に神様なのか？）

「お前一体何歳なんだ？　そんな子供の格好してるけど？」

「私？　えーと、『八千七百十兆七千九十億五千三百四十六万六千五百二十一』歳」

「……お前ババアだな」

「ババアじゃないもん！！」

「ハハハ、でもお前そんな長い間なにしてたんだ？」

「う～ん、他の世界を見守ったりとかかなぁ、て言っても私が出動するくらいの異常事態はめったに起きないんだよね、君が例外だっただけで」

「ふ～ん、そうなのか？　お前の他は誰がいたんだ？」

「誰もいないよ？」

「……え？」

「だから誰もいないよ、私はずっと一人だよ？」

それがどうしたの？　と言うように俺を見上げてくる

（コイツはそんな長い間ずっと一人で…）

ベンチに置いていた手を頭に置いて撫でる。

「？」

神様は不思議がっているようだった。

「おい、お前名前はなんて言うんだ？」

「え～？　ないよ名前なんて一人だったし」

「そうか…じゃあ俺がつけてやるよ」

その少女の容姿を見る。
薄緑の髪、整った顔立ち、
そして一番目に入るのは
透き通るような空色の瞳。

「よし、お前の名前はソラだ」

「ソラ？」

「そうだ、ソラ今からお前と俺は友達だ」

「トモダチ？」

「あぁ」

神様…ソラは「ソラ…、トモダチ…」
とぶつぶつ言っている
しばらくすると
うれしそうに顔をあげ

「うんっ！　よろしくねっ！！」

と言った。

「それじゃ、私もう帰るね！　バイバイ迅！！！」

そう言うと元気に帰っていった。

去ったのを見届けると

俺はルイズの部屋へと戻っていった。

第五話　ソラ（後書き）

どうも～

チート能力に制限をつけてみましたｗｗ

これで原作に近くでもチートにいけるんじゃないかと思いますｗ

こんな文を読んでくださるみなさんありがとうございます！！

でわ！！

第六話　虚無の曜日

翌朝ルイズを起こしに行く
目の下にはやはり隈があった。
よほど疲れていたんだろう

「おい、起きろ朝だぞ」

「ふぁぁぁあぁ…あ、あんた起きたの？」

「おう、悪かったな心配かけて」

「は？　別に心配なんかしてないわよ？」

「……は？」

「あんたは私の使い魔なのよ？　使い魔が怪我でもしたら主人世話を誰がするのよ？　あ、たまっておいた洗濯もの洗っておいてよね」

（な、なんてやつだ…）

ルイズの言動に呆然としている俺
それを気にもとめずルイズは俺にビシッ！っと
指をさし勝ち誇った表情でこう言い放った。

「忘れないで！あんたは私の使い魔なんだからね！！」

（…あ、そういや意識飛ぶ前コイツ初めて「ジン」って呼んだな）

その後ルイズをからかい例のごとく飯を
抜かれた迅は厨房に来ていた。

「『我らの剣』が来たぞ！！」

そういって歓迎してくれるのはマルトー親父
毛嫌いしている貴族を倒してくれた俺を王様みたいにもてなしてくれる

「おう、我らの剣、お前はどこで剣を習った、どうやったらあんなふうに剣を振れるか教えてくれ」

「昔から、格闘技や剣術やっててさ、自然に体が動いたんだよ」

「おう、聞いたかお前ら！　我らの剣は日々の鍛錬を怠らなかったからギーシュを
倒したそうだ！　お前ら忘れるなよ！」

その後妙に盛り上がっている厨房の皆や
『俺はお前の額に接吻するぞ！』と迫ってきた親父を退け
適当にぶらついて時間を潰していった

その夜、ルイズの部屋に戻ろうとするとガチャリと

隣の部屋のドアが開きサラマンダーが出てきた。
「きゅるきゅる」と鳴いて尻尾を振っている。

「お、…あーキュルケか」

確かここでキュルケの部屋に連れてかれるんだよな
だが俺は引っかからんぞ、と思いサラマンダーに
「悪いな、遠慮しとく」と言って部屋に戻るよう促す。
「きゅるぅ…」と残念そうに鳴いて部屋に戻っていった。

「あら？　お帰り」

「おう」

と言ってルイズの部屋に入る
ルイズはもうランジェリー姿で寝るようだった。
しばしその姿を眺めているとルイズが口を開いた。

「あ、そうそう」

「……あ？」

迅が急にどうしたのか
と返事を返す

「あんた今度、剣を買いに行くわよ」

「あぁ、デルフ…っと、剣だな？　でも急にどうしてだ？」

「あんた、この前剣を握ったら急に強くなったしょ？」

「あぁ」

「たぶんあれ使い魔の力だと思うのよね、たしかなんかで
そんなのがあったような気がするんだけど……
まぁとにかく、明日は虚無の曜日だしそれも兼ねて街に連れてって
あげるわ！」

分かったらさっさと寝なさい、と言ってルイズもベットにもぐって
しまった

「りょーかい」

自分もベットと言うには遥かに乏しい藁に入る
（デルフ…か、これでようやくガンダールヴの力が発揮できるな…）
と言って眠りについた。

そのころ隣の部屋

「サラマンダー！！　あんたなんで連れてこないのよ！！」

「きゅるぅぅ…」

サラマンダーが申し訳なさそうに鳴く

「まったく、しょうがないわね…でも私は諦めないわよ『ダーリン』
」

そうして夜は更けていった。

次の日、ルイズと迅は街の街道にいた。

「つー、ケツ痛ぇ…」

「情けないわねぇ、乗馬くらいで…」

ルイズが呆れたように言う

「しょうがねーだろ！！　馬なんて乗ったことねぇんだよ！！」

「ハイハイ」

「流すな！！」

しばらくすると街についた

馬を預け裏の通りを進む

ルイズが立ち止まった。

周りを見てキョロキョロしている

「ここら辺のハズなんだけど…あ、あったわ！」

と言って指をさした方向を見ると
古ぼけた武器やらしきものがあった
その店の中に入る
「いらっしゃいませ」と営業スマイルで店主がでてくる。

「どれがいいかしらねぇ…」

といい剣を探しているルイズ、しかし
それを無視して俺はアイツをの所へ行く。

「俺、これがいい」

「え～、そんなボロっちぃのよりも、こっちの方がいいじゃない」

と言って派手な装飾がしてある剣を指差す

「ボロッちくて悪かったな娘っ子」

デルフリンガーが機嫌悪そうに言う

「やい！　デル公！！　お客様に失礼だろうが！！」

「剣もろくに振れないような小僧がお客様？　ふざけんじゃねぇよ！

耳ちょんぎってやらぁ！　顔をだせ！！」

「まぁまぁ、人を見た目で判断すんなよ、デルフリンガー」

言いながらデルフの柄を掴む。

「なんで俺の名前……おでれーたお前『使い手』か」
「あぁ、そうだお前の六千年ぶりの相棒だ」
「へっ、じゃあよろしく頼むぜ相棒！！」
意気投合する俺達だったが
「ちょっと待ちなさいよ！！　そんなボロ剣買うなんて言ってないでしょ！！」
「ボロ剣とはなんだ！！　娘っ子！！」
「そうよ、ダーリンにはもっと立派な剣じゃなくちゃ」
不意に女の声がし振り向くとキュルケとタバサが立っていた。
タバサは黙って本を読んでいるが
（めんどくさい女が来ちまった…）
心の中で頭を抱える。
するとキュルケがかなりでかい大剣を指し
「店主、あれを買うわ」
「ヘイ、エキューで三千、新金貨で四千五百でさぁ」
キュルケの眉がピクッと動く
「ご主人、ちょっと値段高すぎじゃない？」

と言って店主にからだを摺り寄せる。
店主の顎に指を滑らせ店主は息が出来なくなる
それを見ていると裾がクイッと引っ張られた。
見るとタバサだった。

「長くなるから出ていたほうがいい…」

ボソッと一言

「そうだな」

と言って俺達はキュルケを置いて出て行った。
しばらくするとキュルケが上機嫌で店から出てきて
「ハイ、どうぞ♪」
と俺に大剣を差し出してきた。
「ありがと」と言ってそれを受け取る
ルイズはその時不満そうな目で見ていたが
華麗にスルーした。

「じゃ、帰るか」

と言って各自その場を離れた。

その後
大赤字で嘆いている店主の声がそこいら一帯に響きわたっていた。

第六話　虚無の曜日（後書き）

はい、デルフ登場いたしました！

これでようやく次にいける…

皆さんアドバイスありがとうございます！！

頑張ります！！

第7話　対フーケ目前（前書き）

すみません、久しぶりの投稿です
受験でいろいろ忙しくて、やっと落ち着いてきたので
投稿再開します！

第7話　対フーケ目前

俺は今ロープで縛られている
それは俺に決してそんな性癖があるわけではない
じゃあ何故か、理由は簡単ルイズとキュルケである。

「なー、下ろしてくれよ～」

「いいこと？　あのロープを切ってダーリンを落としたら勝ちよ」

「なー、頼むから～」

「望むところよ！！」

「おーい」

「じゃ先行をどうぞ？　そのくらいのハンデはなくちゃね？」

「おーい！」

「――――！！！　見てなさい！！」

二人とも人の話を全く聞かない
俺に選択権はないんですか？

「いくわよ！！」

ルイズが気合の入った声で呪文を詠唱する。

たしかファイヤーボールだったはずだ。

「ファイヤーボール！」

「ほら、当『チュドーーーーン！！！』

恐る恐る振り向くと俺の後ろの壁が吹き飛んでいたあれが俺に当ってたら……

「こ、殺す気か！　馬鹿野郎！！！」

「馬鹿とはなによ！　ちょっと手元が狂っただけよ！！」

真っ赤になって怒鳴る、でもあれがロープに当っても結構ヤバかったと思いますよ？　ルイズサン？

「やっぱりゼロの二つ名は伊達じゃないわねぇ、次は私ね……ファイヤーボール！！」

プツンッ！

「うおぉぉぉおぉおぉぉぉぉぉぉおぉぉぉおぉぉぉ！！！！」

ファイヤーボールが的確にロープに当たり縛られたまま、真っ逆さまに

落下していく。

「レビテーション」

地面寸前で体が浮き何とか助かる。

「さ、サンキュータバサ」

「この勝負私の勝ちね」

「むぐぐぐぐ！！！」

ドゴーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！！

「「「！？」」」

轟音の方向に振り向くと巨大なゴーレムがヒビの入った壁に拳を叩き込み、中のものを物色していた。
やっと来ましたか

「ありがとうよ、小娘あんたのおかげで簡単に事が済んだ！！」

「あんた誰よ！」

「フーケ、それでわかるだろう？」

数秒後ゴーレムはただの土の山に戻り
フーケも姿を消していた。

翌朝
俺達は宝物庫に集まっていた
オールド・オスマンを含め教師数人と昨日の俺達。

『破壊の杖確かに領収いたしました。土くれのフーケ』
そう書いてあるらしい壁に書かれたフーケの置手紙（？）を読み上げる。

「して？　この現場を見ておったのは誰だね？」

「この三人です」

コルベールが後ろに控えていた俺達を指差す。
ルイズ、キュルケ、タバサ、俺なので四人のはずだが使い魔なのでノーカウントらしい。

「ふむ、詳しく説明したまえ」

そして昨日起きたことを三人は説明しはじめた
途中なんどかオスマンがこちらに視線をよこした、がやっぱりスルーした。

しばらくして

「ふむ、追うにしても手がかりなし、と言うわけか……」

ふと、オスマンはコルベールにたずねた。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたのかね？」
「はて？　どこに行ったのでしょうか？　この非常時に？」
「す、すいません！　昨日の事件について少し調べておりまして…」
ロングルビルが図ったようなタイミングで入ってきた
いや、この人がフーケだからたぶんドアの外で待ち構えてたんだと思うけど。
ふぅ、と一息つけたあとロングルビルは説明をはじめた。
「近在の農村の住民に聞き込みをしたところ、黒ずくめのローブの男が近くの森の廃屋に入っていったとのことです」
「黒いローブ！　フーケで間違いないわ！」
その後ルイズたちが『杖に誓って！』とかいろいろやったが面倒なので省くとしよう

時は進んで例の廃屋の中
ロングルビルは近くを調べに行くと言ってこの場には居らず俺達４人だけである。
「ホレ、破壊の杖」
「あんた見つけるの早いわね…」

ま、知ってましたし
で小屋から出ると

「ゴ、ゴーレム！！！」

さっそくお出ましか
待ち構えてたな、フーケの奴
すかさずタバサは杖を取り出し攻撃する
キュルケも同じように攻撃するが
炎に包まれようとも、氷の矢が刺さろうとも
全く意に介さない。

「撤退」

タバサがそう呟くと、二人は一目散に逃げ出す
だが相変わらずルイズはその場に立っている。

「オイ！　ルイズ！　逃げるぞ！」

「嫌よ！　こいつを捕まえれば誰も私をゼロのルイズと呼ばなくなるでしょ！」

「死んだら元も子も無いだろうが！！」

ルイズの腕を掴み無理やり引っ張ろうとする
それでも動かないので仕方なくお姫様抱っこで運ぶ

「ちょっと！　下ろしなさいよ！！」

「うるせぇ！　暴れんな！　危ねぇだろ！！」

「敵に背を向ける者は貴族じゃないのよ！！」
「だから！　死んだら元も子もないだろうが！
そんなに貴族の名が大事なのか！！」
そこでピタリとルイズが暴れるのを止めた
かと思うと今度は泣き出してしまった
「だって悔しいのよ…いつもいつも馬鹿にされて…」
「……泣くなよ」
サイトが思ったことを考える
ルイズが本当はただの女の子だって言ってたな
それは……本当みたいだな
気張ってプライドも高い奴だけど…普通の女の子なんだな
「…ルイズ」
「ぐすっ…何よ？」
「俺が何とかしてやるよ、使い魔の戦績は主人の戦績でもあるんだろ？」
「何言ってるのよ！？　あんた一人で何が出来るって言うの！！」
風竜に乗っているタバサ達にルイズを引き渡す。
「やってみなきゃ分かんないだろ？」

「ジン！　待ちなさい！　ジンーーーー！！」

ルイズ達が逃げたのを確認し、デルフを抜いてゴーレムに向き直る。

「お！　ようやく出番かい？　相棒！！」

「おう、よろしくたのむぜ！」

ゴーレムはゆっくりとこちらに迫ってくる

「さて、戦闘イベント第二回開始だ！」

第7話　対フーケ目前（後書き）

中途半端に終わってしまったｏｒｚ

次回は戦闘シーンです、もっと筆力上がんないかなぁ・・・

第8話　VSフーケその後

俺とゴーレムは今対峙している
しばらく睨みあいが続くとゴーレムはこちらに向かって
拳を振り下ろしてくる

「よっと！」

それをかわし地面に突き刺さった腕に剣を振り下ろす、が

ガキンッ！

「……うわ～お前使えね～」

「う、うるせいやい！！　って相棒！　上、上！」

拳の追撃をかわしゴーレムと距離を取る

（なにかアイツに対抗できるサイズのものを…）

頭の中に白い巨大ロボを思い浮かべる

「出ろ！　ガンダム！」

……いつまでたっても何も出てくる気配がない

「あれ？　どうなってん、ダァアア！！？」

ゴーレムの拳が飛んできたので回避

「おい！　何やってんだ相棒！！」

「いや、こんなはずでは」

ふと、ソラの言葉を思い出す

『創造するものの構造を大体わかってないとだめだよー♪』

「そういや、そんなこと言ってたな…」

あんな精密機械の塊の構造なんて分かるはずないしな

再び拳が飛んでくる、飛んでかわすと立て続けに

蹴りが飛んできた

空中なので回避ができずにギリギリ体をそらすが

少しくらってしまう、が着地して態勢を立て直し

ゴーレムの懐に入る

「螺旋丸！！」

ボゴォ！

とゴーレムの右腕に穴が開きボロボロ崩れていく、が再び再生して

しまう

「ジンーーーーー！！」

「え？」

声の方向に振り向くとルイズが立ってた。

そんでその手に抱えているものは…

「破壊の杖…もといロケットランチャー！！」
走る速度を上げ説明気味に叫んでから
ルイズからロケランを引っぺがす。
「ジン！　これ破壊の杖なんかじゃないわよ！！　何回振っても魔法なんかでやしないじゃない！！」
「おう！　その通りだ！　これは破壊の杖なんかじゃない」
肩に担ぎ発射する準備が整う。
「ルイズ！　離れてろ！！」
シュポンッ！　と言う気の抜けた音がして
弾がゴーレムに吸い込まれるようにして飛んでいく
そして弾がゴーレムに触れた瞬間…
ドガァアアアアアアアアアン！！！！
爆音が響き渡りゴーレムの上半身が粉々に砕け散る。
残された下半身はゆっくりと膝をつき
土くれに戻っていった。
「あー、危なかった」
「……」
ルイズがあまりの衝撃にフリーズしている。

声をかけてやろうかと思っているとキュルケ達が降りてきた。

「すごいじゃない！！　さすがダーリン！！　…んがっ！」

抱きつこうとしたので顔を抑えて制す。

「……っは！」

あ、再起動

「ジン！　今のは何なのよ！　破壊の杖じゃないってどういうこと！？」

「あぁ、それよりも…出て来いよフーケいるんだろ？」

「あら、ばれてたかい」

草陰からフーケが出てくる。

タバサとキュルケ、ルイズが戦闘態勢をとる、がそれを俺が止める。

「破壊の杖を手に入れたが使い方がわからない、だから異世界から来た俺に使わせて使い方を知ろうとしたんだろ？」

「なんでそれを…まぁいいさ、おかげで使い方も分かった…もうあんたらに用はないよ！！」

フーケがロケランを構えた…と同時に目にも止まらぬスピードで一気に懐に入る。

「なっ！！」

「昇ぉお竜ぅう拳！」

容赦ない回転アッパーがフーケの顎にもろに入る。
フーケの体が宙に舞い…落下

「ぐはっ！！」

続けて俺も華麗に着地…

コケッ

…失敗
ま、まぁいいとして
体に着いた土を払い立ち上がる。
フーケの方を見ると白めを向いて気絶していた。

「さぁて」

3人に向き直り

「帰ろうぜ？」

笑顔で言った。

「…いや、あんた挽回できてないわよ？」

ギクッ！

「ふむ、まさかミス・ロングビルが土くれのフーケ、じゃとわのう…」

学園に帰還しオールド・オスマンに報告を終え
返ろうとしたところを呼び止められた。
まぁ、こっちも用があったから都合よかったけど

「あ、フーケを呼んできてもらえますか？」

「ん？…まぁ構わんが、連れて来るのじゃ」

しばらくしてフーケが入ってくる。
入ってきたとたんに俺のことを睨んできたが
それは無視して話を始める。

「まず、そちらの言いたいことは、このルーンのことですよね？」

自分の左手の甲を指差す
相手は、オスマンとコルベールはなぜそのことを！、と驚いている。

「これは間違いなく、そちらが思っている通りガンダールヴのルーンです」

「なんと！」

「あと、あなた方がギーシュとの決闘を見ていたことも知っています」

「むぅ、君は一体何者なのじゃ？」

俺は自分が異世界から来たことその経路を
話た、まぁ神様のことは詳しくいえないので
なぜかこの能力を持っていたと話したが

「ふむ、そうじゃったのか…その能力、創造主とかいったのう？
少し見せてはもらえんか？」

「まぁ、別に構いませんけど？」

「ほ、本当かの！？」

と言って俺に耳打ちしてくる、が
それを聞いたとたんに俺は吹き出した。

「あんた馬鹿か！！」

「頼む！　後生じゃから！！」

年寄りの癖に泣きそうな顔で頼んでくる。

「まったく、しょうがないですね…」

ため息を着きながら頭の中に創造する
そして…

「おぉ！！！」

「「……」」

コルベールとフーケが白い目でコルベールを見ている
そりゃそうだなんせ俺に頼んだものは…
『純白のパンティ』
お前はウーロンか！　俺は神龍じゃねぇんだぞ！！
と心の中で愚痴りながらも
パンツをもって子供のように喜んでいるにコルベールに
話を続ける。

「で、次はフーケのことです」

自分の名前が出てきたのでフーケはピクリと反応する

「こいつは…あたり前ですが、牢屋にぶち込んでおいてください」

「ふむ、それはそうするがなにか考えでもあるのか？」

「えぇ、ちょっとね」

そういって俺はフーケの下に歩み寄る。

「フーケ」

「…なんだよ」

「お前は牢屋に入れられた後、仮面の男が現れる

そいつに仲間になれと言われるから乗っておけ」
「なんであんたの言うことなんか聞かなきゃならないんだい！！」
あぁ、完全に反抗する気か、仕方がない
フーケの耳元まで顔を近づけ
「頼むよ、マルチダさん」
「！！！？　あんた、なんであたしの名前を！！」
「あんたがいないとティファニアたちが苦しむだろう？」
「ティファニアのことまで…」
もうマルチダは恐怖の目で俺を見ている。
「大丈夫だ安心してくれ、なにもあんたを悪いようにするわけじゃない」
なるべく優しく、信用してもらえるように言う。
「あんたが、自由じゃなけりゃティファニア達も苦しむ
だからその男の誘いにのって欲しいだけだ、スパイってわけだが
こっちに情報提供とかもしなくていいそれで頼む」
俺は手を合わせ頭を下げる。
「…分かったよ、テファが苦しむのは見たくないからね」

「あぁ、ありがとう！！」
その後コルベールにマルチダのことを頼み部屋を後にした。

そして今はパーティー会場
豪華な料理や初めてのむワインに舌鼓を打っているところだ
ワインは初めて飲んだけど以外にイケるな
こっちの世界じゃあ年齢関係ないし
周りを見るとキュルケは数人の男達に囲まれている、
まぁあれはキュルケが悪いんだろう

タバサは山盛りのハシバミ草のサラダをパクパクとすごいスピードで食べていた、俺も少しつまんでみたが…よく食べれるなタバサよ。

皆それぞれにパーティーを楽しんでいるようだ。

『ヴァリエール公爵が息女、
ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな～～～～り～～～～！！』

門に控えていた呼び出しの衛士がルイズの到着を告げ
門の中からルイズが現れる。
真っ白いドレスに身を包み、薄く化粧もしている
周りにいた男共がルイズの周りに我先にと群がる。

あの調子ならしばらくはこれないだろうなと思い

バルコニーへと戻る。
すると上から
「やぁ、楽しんでる？」
「よぉ、ソラ」
ソラが出てきた今度は手のひらサイズだ。
そのままちょこんと俺の頭の上に乗っかる。
「ん？　相棒だれだ？　そいつは？」
抜き身のデルフがカチカチと鳴らしながら聞いてくる。
「こいつ？　俺の友達だよ、な、ソラ？」
「うん！　トモダチだよ！！」
えへへ～、とうれしそうに笑うソラ
あぁ、食い物みてヨダレ垂らすな、お前は子供か。
「あ、もう来たみたいだね、それじゃ！」
ぱっとソラが消えるすると前からルイズがやってきた。
「楽しんでるみたいね」
「まぁな」
「おぉ、馬子にも衣装だな」

「うるさい」

ルイズがキッ！　と睨むとデルフは喋るのを止めた。

「お前は踊らないのか？」

「相手がいないのよ」

さっき男共に囲まれてただろ、と思ったが
今は紳士的にエスコートしてあげますか。

「よろしければ一緒に踊りませんか？　お嬢様？」

と言ってひざまづいて手を差し伸べる。
ルイズは少し驚いたようだったが
今日だけだからね、と言って手を取ってくれた。
まったく、素直じゃないな

「と言っても俺踊ったことないんだが」

「あたしに合せなさい」

最初はぎこちなかったがだんだんとステップが合ってくる。
ルイズはその最中何度かなにか言いたげな様子だ
何を言いたいかは分かっている、だったら俺の方から言ってやろう。

「なぁ？　信じたか？　俺のこと」

「え？」

「いきなり異世界から来たって言われてもそりゃ驚くよな」

「……」

「本当に嫌なら信じなくてもいいんだぞ？」

「…いえ信じるわ、あんたの世界のことも、それにあんたのことも」

「そうか…」

「それにね、……ありがとう助けてくれて」

「……おう」

それからお互いなんだか恥ずかしくて
黙ったままステップを踏んでいた。

「おでれーた！　主人のダンスの相手をつとめる使い魔なんて初めてみたぜ！」

デルフの笑い声（？）がカチカチと二つの月が登る空に響いていた。

第8話　VSフーケその後（後書き）

最近いろいろ忙しくて
執筆ペースが落ちています
でも、頑張ります！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7447j/

ゼロの使い魔はチート

2010年10月23日05時41分発行